

# 北米における日本文学研究の動向

—1980年代後半から現在までを中心に—

鶴田 欣也 (ブリティッシュ・コロンビア大学)

TSURUTA Kinya

北米における日本文学研究は翻訳から始まったといつてよい。特に終戦後から60年代を経て70年代に至るまでの期間、北米において日本文学が注目されたのは、極めて優秀な翻訳者の仕事に負うことが多い。当時、サイデンスティック、キーン、マックレラン、ヒベット等の優れた翻訳者に恵まれた日本文学は幸運であった。それ以後、彼等よりも少し若い世代から二代も三代も若い卓越した才能を持つ翻訳者によって引き継がれ、いまや優秀な翻訳者はこの分野の伝統とさえなった感がある。1980年代から1990年代にかけ数多くの作品が出版され、選集が編まれている。その範囲はいわゆる「正典」的な作家を越え周辺作家や知名度の高い作家の周辺的作品を含むようになった。これらの翻訳者の名前を一部だけあげると、ヘレン・マッカー、バートン・ワットソン、カレン・ブラゼル、ロイヤル・タイラーが前近代で、また、ジョン・ベスター、ジェイ・ルービン、ロバート・ダンリー、ヒロアキ・サトー、ウィリアム・ナッフ、ジョン・ネイサン、ポール・マッカーシー、ロバート・エップ等が近代で活躍している。

翻訳は文学作品だけではなく、批評や文学史にまで及んでいるのがこの時期の特徴のひとつだ。例えば柄谷行人の『近代文学の起源』や『隠喩としての建築』が英訳出版されたが、すでに柄谷を引用する論文が相当数見られることから、彼の北米日本文学研究に与えた刺激の程度がうかがわれる。

80年代に日本文学史の大著が二つ完成された。加藤周一の『日本文学史序説』二巻と小西甚一の『日本文芸史』四巻であるが、『序説』は全三巻として、『文芸史』は三巻まで英訳された。その上これに昨年完結したドナルド・キーンによる『日本文学史』全四巻が加わった。それまで英文による日本文学史は百年も前に出版された W. G. アストンのものだけなので、これは画期的なことだといえる。北米の読者、研究者達は加藤の『序説』、文学を文芸にまで広げ、新しい時代区分を提唱する小西の『文芸史』、すべての原典を自ら読みこなし、百科全書的、博覧強記のキーンの『文学史』をこれからじっくり読み較べることではかりしれぬ利益を受けることになるだろう。

さてそれでは前近代と近代に分けて研究の動向を見ていくことにする。この時期前近代文学研究で目立ったのは『源氏物語』についていくつか洗練された研究が発表されたことであろう。1987年にノーマ・フィールド『源氏物語における憧れの輝き』、ハルオ・シラネ『夢の浮橋 源氏物語の詩学』という、特徴のある本が出版された。両者とも日本の源氏学を充分にこなし自家薬籠中のものとしているのと、西洋の文学理論に通じていて、いたるところに応用している。特にフィールドは宗教学、人類学、フランスの文学理論を使い脱構築的、フェミニスト的であるが、結果的には還元的である。一方シラネはより構造的、歴史的であり厳密な学問的姿勢を貫いてい

る。シラネは『源氏』を文学的、歴史的、社会的、政治的な情況の中に据えて説明し、原則的にはロマンスとして捉えている。したがって光源氏を周囲と有機的に反応しながら成長していく人物として受けとめるのに対し、フィールドは彼を成長のない人物、自分のエゴのために女性を計画的に次々と征服していく人物であり、彼には女性に対する優越感はあるとも愛はないと断じている。

フィールドはエリアーデ、バフチン、デリダ、フェミニスト批評を従横に使い、この作品を分析するのだが、そういう文学理論に慣れていない読者はまごつくかもしれない。しかし、その特徴のひとつは平安文学や『源氏』に親しんでいない読者でも、西洋の文学理論を一応こなしている人は彼女の論旨についていけることだ。シラネは西洋の理論に充分目を配りつつも『源氏』が咲きいでた土壤に立脚し、先行文学、宮廷、政治、社会、歴史、それから美学を詳細に説明しているので、『源氏』のみならず、平安時代に対する極めて有効な手引にもなっている。

両者はこのように性格を異にしながら、相互を補い合う関係にあるといえる。フィールドの理論による分析は今迄に見えなかったものを見せてくれる反面、切り残したものが目につき、どうしても還元的になる。シラネの学問的手付きは厳密で危な気がないが当然思いがけぬアイディアの飛躍も少ない。この二人の学問は80年代から90年代にかけて北米における日本文学研究について二つのことを物語っている。ひとつは学問がかなり洗練され、高いレベルに達してきていること、もうひとつは西洋の文学理論を応用し、日本文学を脱構築していこうとする学者とそういう傾向に関心を払いながらも基本的には構造的、歴史的なアプローチを保ち成果を挙げていこうとする学者の二派に分かれてきたということである。しかしまだ過渡期であるのでこの区分には灰色の部分がつきまとう。後に見るようにポストモダン、脱構築の理論にのめり込むのは近代を対象とする学者により多く見られるようだ。

1991年にジャネット・ゴフの『能と「源氏物語」—15篇の能における引喩法』が出版されたが、これは能作者がいかに自分の作品のテキストに『源氏』の原典からではなく要約されたものや「よりあい」の語彙から引用文を取り入れているかを詳細に証明した労作である。この本は能が『源氏』を保存するのにいかに重要な役割を果たしてきたかも教えてくれる。

リチャード・オカダによる『抵抗の形態「源氏物語」およびその他平安中期のテキストにおける言語、詩、語り』（1992年）は平安のひらがなのテキストの言語学的、修辞学的特徴が抵抗の形態だと主張している。オカダの方法論は権威と抵抗、中心と周辺、男性的と女性的、文学と口誦と二項対立的だ。漢字に対するひらがなに口誦性を見、それを権威に対する抵抗として捉えるのであるが、これにもかなり切り捨てが多いようだ。

ミシェル・マルラは『不満の美学—中世日本文学における政治と隠遁』（1991）で「みやび」などを含む中世の審美学に新しい政治的な読みを提唱している点でオカダの考え方に多少似ている。フーコーやマックギャン等を援用し、過去のテキストを歴史的に再現しようとする。マルラは「みやび」などの語彙に政治の場で表現すると危険な、しかし十分に政治的な意味を見出している。不満の政治美学である。この新しい政治的な見方はわれわれの視野を広げてくれると同時に、中世から美、優雅、神秘等人間存在の他の面を追い出してしまう結果を招いた。

ディヴィット・ポラックは1986年に『意味の割れ目—日本による中国の総合、8世紀から18世紀まで』という刺激的な本を上梓した。「日本」というかたちに表せないところ／意味を表すた

めに日本は「中国」という異形で外部のかたちを必要としたというのがその主旨である。これを讀むと「中国」がいかに「日本」に深く関わっていたかを再認識させられる。

また、アール・マイナー、小田桐弘子、ロバート・モレルによる労作「プリンストン日本古典文学必携」で研究が一段とやり易くなったこと、他にも優れた研究がいくつもあるが紙面の都合上割愛せざるをえないことを付け加えたい。

さて、ここから近代に入る。この時期に谷崎潤一郎、西脇順三郎、太宰治についての優れた研究書が出た。ケン・イトウの『欲望のヴィジョン—谷崎の虚構の世界』（1991）は谷崎の作品と伝記を相互に関連させながら対象に迫っていく年代的なアプローチをとっている。サイドのオリエンタリズム、ジラルの三角形の欲望、パタイユの禁止と侵犯等のパラダイムも視野に入れながら複雑で重層的な谷崎の虚構の世界を鋭く解明している。

ホセア・ヒラタの『西脇順三郎の詩と詩学—翻訳のなかのモダニズム』（1993）はデリダとベンヤミンの理論を実によく消化して、詩というものはそれ自身の消滅に向かうという西脇の詩学に応用し見事な研究に仕上げている。谷崎と西脇には英文の研究書が皆無であったこともあり、彼等の貢献は大きい。

アラン・ウルフの『近代日本における自殺の文学—太宰治の場合』は徹底した脱構築の方法を太宰治に応用している。太宰は自己を記念碑化することに抵抗したという点を証明するのであるが、二項対立の構造主義的なものを一切排除する結果、太宰と彼の作品は最後に消えてしまう。ヒラタの流麗な文体に比してウルフのは難渋である。この難渋さが脱構築の持つ一種のニヒリズムを際立たせている。

ミシャル・マルラの仕事に見られるように語りを歴史化、政治化して当然とされていたもののなかに隠されているものを発見していく傾向がある。日本近代文学でその手法を使ってそれなりの成果をあげたのが、ジェームス・フジイの『共謀の小説—近代日本散文叙述における主体』（1993）である。例えば漱石の『こゝろ』はアジアの国に対して植民地主義的侵略を犯している日本の歴史性にわざと目を瞑ることで近代日本文学の「正典」になったのだとフジイは主張する。新しい見方ではあるが、かなり反論もあることと思われる。デイヴィッド・ポラックによる『文化に逆らって読む—近代小説におけるイデオロギイと語り』（1992）は外国文学を讀む際のスタンスの問題をとりあげた重要な研究である。他の文化を讀むとき、相手を自分の文化の安っぽい亜流にしてしまいがちだが、ポラックはどのようにしてそのような陥穽にはまらないようにするかという問題をとり上げる。彼の答を簡略化していえば「文化に逆らって読む」のである。この文化は自分の文化と相手の文化の二つを意味する。両方の文化の内と外に同時に立つことを彼は提唱する。実際にそういうことが出来るのかどうかは別問題として、われわれが常に直面していることをはっきりと意識化したことは評価すべきだろう。

80年代から90年代にかけてひとつの大きな収穫はエドワード・ファウラーの『告白の修辞学—二十世紀初期の私小説』だと思われる。ファウラーは私小説という形態の核に肉迫することで近代日本文学の実態に光を当てている。彼は小説をノベルから切り離し、一般に信じられていた小説と私小説の距離をとり除いてしまった。この本はシラネの『源氏』についての仕事とともにこの分野の最高級の研究に属する。

この時期に多方面に学問的な刺激を与え、八面六臂の仕事をした人がいる。『ポストモダニズ

ムと日本』(1989)『世界のなかの日本』(1993)を共編、『中心を離れて—日本と米国の権力と文化の関係』(1991)を書いたマサオ・ミヨシである。ここでは『中心を離れて』をとり上げてみる。

脱構築の命題である脱中心化がこの本で一番大きな関心事である。日米の政治、経済、社会、文学の分野を従横に駆けめぐりながらミヨシは両国の中心性の背後に安眠している仮説、臆説を片端から破壊していく。槍玉に上るのは、西洋の思想のみに普遍性ありとする西洋普遍論者と日本文化はユニークだとし、他文化の接近を許さない日本本質論者である。トピックは日米貿易摩擦、ジャパン・バッシング、西洋のノベルと日本の小説、谷崎潤一郎、三島由紀夫、大島渚、天皇の死、女性文学、日本における座談会と多岐に亘る。

ミヨシのキーワードは覇権（ヘゲモニー）であり、テーマはヘゲモニーに対するあくなき抵抗である。そしてこの本の目的はこのテーマを含む新しい世界像の提唱である。その世界像とは「権力の中心ではなく、全く命令する中心のない世界との関連で部分や周辺がそのままの姿で見えるような世界」だ。こういう観点で切られると、上記のトピックでミヨシの鋒先を躲せるものは少ない。ほとんど中心性を含んでいたり、それに対する憧憬を持っていたりするからだ。ミヨシのおめがねにかなったのは大江健三郎、宮本百合子、津島佑子ぐらいである。これが、正典性を排除するミヨシの「<sup>キャン</sup>正典」といえよう。だが、最近大江はノーベル賞を受けて「中心」に入ってしまった。

しかしこの挑発的な脱構築の本は構造的な二項対立的手法で書かれているし、また、西欧中心主義を喰いながら、どこからともなく西欧の臭いが立ち昇ってくる。ジャパン・バッシングに対して日本側からの論理的な回答がないことを嘆いて見せるとき、衣の下に隠された鎧、西欧のロゴセントリズムがちらつく。

権力も中心性も人間が持って生まれた強力な欲望だ。中心性の全くない世界というのは、「中心」につらなる大学で禄を食み、「正典」らしきものを教えている頭の古い私には単なるユートピアのような気がする。しかも、ミヨシの提唱する「中心のない」世界は彼の脱構築しようとする「中心のある」世界と対称をなし、皮肉にも構造的だ。独断と創見に彩られたこの本を書いたミヨシは過去いくつもの論争を引き起し、この分野に刺激を与え、その「中心」に挑戦してきた。今や彼の息のかかった若い学者も成長し、ミヨシはこの分野の大きな「中心」のひとつになっている感がある。

さてこの辺で簡単なまとめが必要だ。80年代後半から現在にかけて、以前からの優れた翻訳者の伝統が引き継がれる。翻訳は正典作家から周辺作家に、正典作家でも周辺の作品へと向かいつつある。ステューヴ・ラブソンの沖縄作家集やポール・マッカーシー訳の谷崎の『猫と庄造と二人の女』等がその例である。

研究はポストモダン、脱構築派の進出と影響が著しい。北米で50年代から70年代まで地域研究の一部として育ってきた日本文学は、地方性、いい換えれば周辺性を脱ぎ捨てて、世界の文学研究に加わりつつある。国境線がぼやけると同時に文学研究という境界線も脱構築され、その意味を失いつつある。文学、歴史、政治学、人類学、社会学等すべて共通の場にひきずり出されて、脱構築という共通の「哲学」の光の下に検証されるようになった。中心を支える構造を解体し、そのヘゲモニーのもとにあえぐ周辺分子を解放する。文学研究は審美学ではなくなり、政治学や哲学の様相を帯びるようになった。

最後になって紙面がつきたが、こういう脱構築の動きと相俟って日本文学でも女性学、フェミニズム研究が目覚ましい進歩をとげた。ユキコ・タナカ、マコト・ウエダ、ヴィクトリア・ヴァーノン、ノリコ・ミズタ・リビット、キョーコ・イリエ・セルドン等による選集、チェコ・ムルハーノンの『優雅な勇士達—日本の伝説的な女性』(1991)、や『日本の女性作家—伝記史料』(1994)等の貢献が大きい。またレベッカ・コーブランド、やフィリス・バーンボームの宇野千代についての仕事も注目を引いた。その他、幸田文、岡本かの子、瀬戸内晴美、曾野綾子、有吉佐和子、津島佑子、山田詠美、吉本ばなな等の作品が続々と英訳され始めているが、シラネ、ゴフ、ファウラー、イトー等の仕事に較べられる研究はまだ出ていない。だがこれは時間の問題だろう。

1990年、ハインツ・モリオカとミヨコ・ササキによる「落語——日本の大衆文芸」という本が出た。80年代後半から90年代前半にかけての日本文学研究において、周辺性が市民権を手に入れつつあることを示す意味でこれほど象徴的な本はない。落語研究書がハーバード大学から出版されると70年代に誰が予想したであろうか。

1980年代後半から90年代初期にかけて北米の日本文学研究は内からの充実と外からの刺激で多く成果を残すと同時に将来のより大きな可能性を示唆している。

#### [General]

Kato, Shuichi. *A History of Japanese Literature*, 3 vols, Tokyo, New York and San Francisco: Kodansha International, 1983.

Keene, Donald. *World Within Walls: Japanese Literature of the Pre-Modern Era, 1600-1867*. New York: Holt, 1976.

—. *Dawn to the West: Japanese Literature of the Modern Era*. 2 vols. New York: Holt, 1984.

—. *Seeds in the Heart: Japanese Literature from Earliest Times to the Late Sixteenth Century*. New York: Holt, 1993.

Konishi, Jin'ichi. *A History of Japanese Literature*, 4 vols. Princeton, N.J.: Princeton University Press, 1984.

Rimer, J. Thomas. *Reader's Guide to Japanese Literature*. Tokyo and New York: Kodansha International, 1988.

#### [Pre-Modern: Studies]

Arntzen, Sonja. *Ikkyu and the Crazy Cloud Anthology: A Zen Poet of Medieval Japan*. Tokyo: University of Tokyo, 1986.

Borgen, Robert. *Sugawara no Michizane and the Early Heian Court*. Harvard University Council on East Asian Studies, distributed by Harvard University Press, 1986.

Child, Margaret Helen. *Rethinking Sorrow: Revelatory Tales of Late Medieval Japan*. Center for Japanese Studies, University of Michigan, 1991.

Eversole, Gary L. *Ritual Poetry and the Poetics of Death in Early Japan*. Princeton: Princeton University Press, 1989.

Field, Norma. *The Splendor of Longing in the Tale of Genji*. Princeton: Princeton University Press, 1987.

Gerstle, Andrew. *Circles of Fantasy: Convention in the Plays of Chikamatsu*. Harvard East Asian Monograph 116. Harvard University Press, 1986.

Goff, Janet. *Noh Drama and the Tale of Genji: The Art of Allusion in Fifteen Classic Plays*. Princeton: Princeton University Press, 1991.

Hare, Thomas B. *Zeami's Style: The Noh Plays of Zeami Motokiyo*. Stanford: Stanford University Press, 1986.

- Huey, Robert. *Kyogoku Tamekane: Poetry and Politics in Late Kamakura Japan*. Stanford: Stanford University Press, 1989.
- Kamens, Edward. *The Buddhist Poetry of the Great Kamo Priestess: Daisaiin Senshi and Hosshima Wakashu*. Michigan Monograph Series, Center for Japanese Studies, University of Michigan, 1990.
- Leutner, Robert W. *Shikitei Sanba and the Comic Tradition in Edo Fiction*. Harvard Yenching Institute Monograph 25. Harvard University Press, 1985.
- Marra, Michiel. *The Aesthetics of Discontent: Politics and Reclusion in Medieval Japanese Literature*. Honolulu: University of Hawaii, 1991.
- McCullough, Helen Craig. *Brocade by Night: 'Kokin Wakashu' and the Court Style in Japanese Classical Poetry*. Stanford: Stanford University Press, 1985.
- Miner, Earl, ed. *Principles of Classical Japanese Literature*. Princeton: Princeton University Press, 1985.
- Miner, Earl, Hiroko Odagiri and Robert Morrell. *The Princeton Companion to Classical Japanese Literature*. Princeton: Princeton University Press, 1986.
- Okada, Richard. *Figures of Resistance: Language, Poetry and Narrating in the Tale of Genji and Other Mid-Heian Texts*. Durham: Duke University Press, 1992.
- Plutschow, Herbert E. *Chaos and Cosmos: Ritual in Early and Medieval Literature*. Leiden: E.J.Brill, 1990.
- Pollack, David. *The Fracture of Meaning: Japan's Synthesis of China from the Eighth through the Eighteenth Centuries*. Princeton: Princeton University Press, 1986.
- Rimer, J. Thomas. *Pilgrimages: Aspects of Japanese Literature and Culture*. Honolulu: University of Hawaii, 1988.
- Sanford, James H., William R. LaFleur and Masatoshi Nagatomi. *Flowering Traces: Buddhism in the Literary and Visual Arts of Japan*. Princeton: Princeton University Press, 1992.
- Tyler, Royall. *The Miracle of the Kasuga Diet*. New York: Columbia University Press, 1990.
- Videen, Susan Dawning. *Tales of Heichu*. Harvard East Asian Monographs 137. Harvard University Press, 1989.

### [Modern: Studies]

- Copeland, Rebecca L. *The Sound of the Wind: The Life and Works of Uno Chiyo*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1992.
- Fowler, Edward. *The Rhetoric of Confession: Shishosetsu in Early Twentieth Century Japanese Fiction*. Berkeley: University of California Press, 1988.
- Fujii, James. *Complicit Fictions: The Subject in the Modern Japanese Prose Narrative*. Berkeley: University of California Press, 1993.
- Gessel, Van C. *The Sting of Life: Four Contemporary Japanese Novelists*. New York: Columbia University Press, 1989.
- . *Three Modern Novelists: Soseki, Tanizaki, Kawabata*. Tokyo and New York: Kondansha International, 1993.
- Goodman, David G. *Japanese Drama and Culture in 1960's: The Return of the Gods*. Armonk, N.Y.: M.E. Sharpe, 1988.
- Hirata, Hosea. *The Poetry and Poetics of Nishiwaki Jun'zaburo: Modeonism in Translation*. Princeton: Princeton University Press, 1993.
- Ito, Ken. K. *Visions of Desire: Tanizaki's Fictional Worlds*. Stanford: Stanford University Press, 1991.
- Karatani, Kojin. *Origins of Modern Japanese Literature*. Trans. by Brett de Bary. Durham: Duke University Press, 1993.
- Liman, Anthony V. *A Critical Study of the Literary Style of Ibuse Masuji: As Sensitive as Water*. Lewiston, N.Y.: Edwin Mellen, 1992.



- Lyons, Phyllis I. *The Saga of Dazai Osamu: A Critical Study with Translations*. Stanford: Stanford University Press, 1985.
- Marcus, Marvin. *Paragons of the Ordinary: The Biographical Literature of Mori Ogai*. Honolulu: University of Hawaii Press, 1993.
- Miyoshi, Masao and H.D. Harootunian, eds. *Postmodernism and Japan*. Durham: Duke University Press, 1989.
- , eds. *Japan in the World*. Durham: Duke University Press, 1993.
- Miyoshi, Masao. *Off Center: Power and Culture Relations between Japan and the United States*. Cambridge: Harvard University, 1991.
- Morioka, Heinz and Miyoko Sasaki. *Rakugo: The Popular Narrative Art of Japan*. Harvard East Asian Monograph 138, 1990.
- O'Brien, James. *Akutagawa and Dazai: Instances of Literary Adaption*. Trans. by James O'Brien. Center for Asian Studies, Arizona State University, 1988.
- Olson, Lawrence. *Ambivalent Moderns: Portraits of Japanese Cultural Identity*. Lanham, M.D.: Rowman and Littlefield, 1992.
- Silverberg, Miriam. *Changing Songs: The Marxist Manifestos of Nakano Shigeharu*. Princeton: Princeton University Press, 1990.
- Tansman, Alan. *The Writings of Koda Aya: A Japanese Literary Daughter*. New Haven: Yale University Press, 1993.
- Treat, John Whittier. *Pools of Water, Pillars of Fire: The Literature of Ibuse Masuji*. Seattle: University of Washington Press, 1988.
- Vernon, Victoria V. *Daughters of the Moon: Wish, Will and Social Constraint in Fiction by Modern Japanese Women*. Japanese Research Monograph 9, Center for Japanese Studies, Institute of East Asian Studies, University of California, Berkeley, 1988.
- Wilson, Michiko N. *The Marginal World of Oe Kenzaburo*. Armonk, N.Y.: M.E. Sharpe, 1986.
- Wolfe, Alan. *Suicidal Narrative in Modern Japan: The Case of Dazai Osamu*. Princeton: Princeton University Press, 1990.